岡山秀吉の手工教育論に関する考察〔Ⅰ〕

宮坂元裕*

A Study on the Hidekichi OKAYAMA's
Theory of Handicrafts Education.

Motohiro MIYASAKA

はじめに
1．上原六四郎　年譜
2．岡山秀吉　年譜
3．小学校教師用 手工教科書 に関する考察
おわりに

はじめに

「手工」は，しゅこうと読む。この手工が我が国の学校教育に登場するのは，明治19年(1886）であり，表面上から消えるのは，昭和16年（1941）である。従って義務教育に於いて手工科が行われた期間は約55年間ということになる。この間この教科は決して隆盛を極めたわけではなく，むしろ低迷を続けた。出発時点での教科目標は，途中二転三転し，消えかけたりしながら，第二次世界大戦中に「工作」に引き継がれる形で，その名称は消滅する。

しかし，手工教育は，19世紀後半，ヨーロッパを中心として世界的な広がりを見せ，その開始時期は，一戸清方「日本手工原論」によると以下のようである。

『芬　蘭（フィンランド）	1866年	獨　逸（ドイツ）	1880年
瑞　典（スウェーデン）	1877年	瑞　西（スイス）	1882年
佛蘭西（フランス）	1882年	墺地利（オーストリア）	1883年
白耳義（ベルギー）	1884年	露西亞（ロシア）	1884年
諾　威（ノルウェー）	1891年	英吉利（イギリス）	1890年
丁　抹（デンマーク）	1873年	日　本	1885年
米合衆国（アメリカ合衆国）	1876年』[1]		

〔但し（　）内は筆者の追加である〕

これを見ると，日本は，決して世界に遅れを取ってはいない。日本の手工教育は，職人

＊美術科教育・横浜国立大学教育学部

教育あるいは工業教育から出発する考え方と，西洋から，にわかに輸入されたスロイド（Slöjd）という考え方の両方の間で揺れ動きながら，複雑多難な道をたどることになる。

明治初期の教育の特徴は，各領域の概念が定まらず，頂点に立つ何人かの人間が，いくつもの分野を同時に担当しながら，専門家を育てるという方法を取った。外国への留学も盛んに行われた。優れた人物は生涯の間に8回洋行する者も出た。[2]

手工教育を考える時，明治初期の指導者は，やがてその教育政策を中心になって行う立場と，そうはなれなくて，傍観ないしは批判する立場へと二手に分かれて行った。しかし，手工教育が打ち出された直後には，それぞれの立場で，手工教育とは，このようなものであるという書き方で，自分の考えを述べている。そして，明治20年代と明治40年代とでは，手工という概念がずいぶん異なり，手工教育の混乱ぶりが窺える。

元三重大学教授　富田馨吾氏は手工教育関係資料の収集家として知られているが，手工教育第186号に手工に関する図書リストを載せている。それによると手工教育関連図書は明治20年から出初めている。その最初期の出版物である瓜生　寅著「手工論」は，おそらく「小学校用手工篇」のことであり，これは三冊に分かれているが，その第一に次のような文章が有り，当時の「手工」の考え方が良く表れている。

『第一章　手工

職工ニ機械力ノ智識ト，手ノ熟練トヲ併セ用フベキモノアリ，專ラ我ガ手端ノ熟練ノミヲ用フルモノアリ，大工，鍛冶，時計師，指物師等ハ，機械力ノ學識ト，手ノ熟練トヲ併セ用ヒ，仕立屋，靴師ノ如キハ，專ラ手ノ熟練ヲ用フルモノニシテ，西洋ニテハ，各々之ヲ區別シテ，其名目ヲ殊ニスレ𪜈モ（トモ），何レモ其手ノ熟練ヲ要用ト爲サヾルモノハナシ，故ニ我邦ニテハ合セ稱シテ，均ク手工ト謂フ，即チ所謂ユル職人ナリ，』[3]

この本は，和綴じで，第一は上記の文章の前に，百工總論，上記文章の後に，第二章手工大別　第三章手工ハ用具ヲ必要トス　第四章木工，と続き61頁ある。第二は，第二十一章金工に始まり54頁ある。第三は第四十四章陶工（ヤキモノシ）輪車（ロクロ）に始まり，101頁　第六十八章手工理財論で終了する。一読したところ技術指導書である。

富田氏のリストに，元上越教育大学教授　熊本高工氏のリストを合わせて「小学校教師用手工教科書」が文部省より出版される以前，明治36年までの出版物のリストを次に載せる。[4]（但し，資料をもとに筆者が年代順に並べ替えた。）

- 瓜生　寅著　ママ手工論　明治20年（おそらく小学校用手工篇と同じものであろう）
- 平賀義夫著　手工教科書　明治20年
- 浅井得次郎・荘資親　共著　手工教授新論　明治20年

　　3

- 細川兼大郎著　手工科工具使用法解説　明治21年
- 上原六四郎著　東京府学術講義手工科講義録　明治21年12月上巻　明治22年2月下巻

　　2 (3)

- 文　部　省　技芸教育に関する調査報告　明治22年
- 鈴木吉蔵著　手工科講義録　明治22年
- 峯是三郎著　手芸教育論　明治22年

　　3

- 山田要吉著　手工製作法　明治23年　　1

・浅尾重敏著　手工科教授法尋常科用　明治24年	・1
・一戸清方著　理論実地手工書　明治25年10月	4
・中根　明著　手工論　明治25年	
・永江　直著　手工編　明治25年	
・渋江　保著　簡易木工学　明治25年	
・伊藤為吉著　木工術教科書　明治26年	・1
・一戸清方著　中等教育手工工具論　明治27年	2
・神作浜吉著　技芸教育新書　上下　明治27年	(3)
・一戸清方著　工場用材料　明治29年	・1
・岡山秀吉著　普通木工教科書　明治30年7月	・1
・一戸清方著　普通木工術　明治32年5月	・1
・高等師範学校附属小学校手工科授業細目　明治34年9月	・1
・小西久磨著　実科教育手工新書　明治36年6月	6
・上原六四郎・岡山秀吉共著　尋常高等小学手工製作図　明治36年7月	
・小西久磨著　小学校手工科新設法及教授法　明治36年	
・小西久磨著　紙細工編　明治36年	
・山田春耕著　小学校に於ける手工科の理論及実際　明治36年	
・伊藤珍平・中村国穂共著　手工の理論及実際　明治36年	

この時期，図画の教科書は児童用が含まれていたにせよ，明治20年12編，明治21年11編，明治22年11編，明治23年3編，明治24年5編，明治25年13編，明治26年18編，明治27年21編，明治28年5編，明治29年5編，明治30年2編，明治31年10編，明治32年18編，明治33年39編，明治34年34編，明治35年23編，明治36年7編，計237編のおびただしい出版点数[5]であった。これに比べれば，教師用書，あるいは教師用教科書のみの編数であっても，手工関係の少なさが実感できる。

上記リストの中で，一戸清方は重要な位置を占めている。

一戸清方は，明治24年に始めて手工科の試験検定が行われた時，これに応じて，尋常師範学校の手工科教員の免許状を受領した。伊藤氏の資料では『我が國最初の手工試験合格者の榮譽を擔はれた。』[6]と有る。しかし，鈴木氏の資料では『明治25年には第一回文部省手工科検定試験に合格した。』[7]とあり，1年ずれている。阿部氏の資料では『明治26年……』[8]となっている。このことはいずれ明らかにするつもりでいるが，いずれにしろ，手工教育に生涯をささげた1人である。そして岡山秀吉と並ぶ手工教育の中心人物でもある。

明治25年，一戸が初めて出版したと思われる「理論実地手工書」の中で，手工について次のように述べている。

『第一編　總論

手工トハ如何ナル事ヲ謂フヤ曰ク工業ニ關スル諸般ノ練習ニシテ仕立屋靴師ノ如ク専ラ手ノ熟練ヲ用フルモノアレハ又大工鍛冶時計師等ノ如ク手ノ熟練ニ加フルニ機械力ノ作用ヲ以テスルモノモアリ然レトモ細工ノ上ニハ孰レモ手ノ熟練ヲ緊要トスル故ニ皆之ヲ

手工トハ謂フナリ』[9]P.1

『手工ノ目的

……客年文部省令第十一號ヲ以テ小學校教則大綱ヲ發布シ其第十三條ヲ以テ手工ノ要旨ヲ確定セラレタリ此要旨ハ取リモ直サス目的ナレハ吾々ハ之ヲ本據トシテ將ニ說ク所アラントス』[9]P.3~4

ところが，同じ著者は，明治40年その著「日本手工原論」の中で，手工について，次のように述べている。

『第一章　手工ノ何物タルヲ論ス

手工ハ手藝ナリ，教育ノ原理ニ據レル手藝ノ訓練ナリ。手工教育ハ，工場教授ノ方法ヲカリテ，身心ヲ活動セシムルモノナリ。兒童ハ是レニ由リテ精神ヲ融和シ，自ラ能ク勞シ，腦ト眼ト手トノ自然的膨脹發展ヲ爲シ，注意，勤勉，秩序，自重，自治，忍耐ノ力ヲ養ヒ，且ツ審美ノ情ヲ陶冶シ得ル。故ニ手工ハ，教育ノ原理ニ據レル手藝ノ訓練ナリト雖モ，其主眼ハ手藝家ヲ造ルニアラス，職業者ヲ殖スニアラス，恰モ理學ノ如キモノヲ實驗シ，心身勞逸ノ轉換作用ニ依リテ，諸學科ノ勇氣ヲ皷舞シ，修身科ト相須テ，教育ノ大目的ヲ達セシメントスル新手段タルナリ。換言スレハ，兒童天性ノ好ム所ニ乘シ，アラユル覺官ヲ使用セシメ，直觀的愉快ニ外界ノ道理ヲ知リ，進ンテ人生ノ定軌ヲ悟ラシムルニ在リ』[10]

たまたまこの三つの資料を並べて見ただけでも，瓜生は「手工，即ちいわゆる職人なり」一戸は，「工業に関する諸般の練習にして……」と述べている。ところが，同じ一戸は明治40年代になると，「手工は手芸の訓練なり……理学の如きものを実験し，心身労逸の転換作用に依りて，諸学科の勇気を皷舞し，修身科と相須って，教育の大目的を……」と述べ，考えが変化し，この教科の不安定性を示している。

明治19年5月25日文部省令第8号第3条に於いて，『……土地ノ情況ニ因テハ英語，農業，手工，商業ノ一科若クハ二科ヲ加フルコトヲ得……』[11]の中に初めて「手工」という語句が出現したことは多くの資料によって明らかである。そして，農業と商業の間に有ることは，工業に代わる教科として考えられていたことで，明治14年7月29日附の文部省達28号及び明治19年6月22日文部省令第14号その他で，中学校，尋常中学校で，農業，工業，商業が並んでいることからも明らかである。

しかし，手工と工業は別のものであるという意識は最初から有ったものと思われる。明治21年8月30日師範学校教員手工科講習会の終了式で，森　有禮（モリ・アリノリ）文部大臣は次のように述べている。

『手工・農業・商業ノ學科ハ，土地ノ情況ニ從テ高等小學校ニ加ヘ置クコト現行學制ノ可トスル所ナリ。之レ全ク兒童ヲ勤働ノ習慣ニ養成シ，其ノ長ズルニ及ンデハ以テ獨リ其ノ一個人ノ自保自活ヲ得ル爲メノミナラズ，其ノ家族親戚朋友同鄉及ビ國家ノ爲メ，其ノ仁情義心ヲ盡スニ足ルベキ實力ノ基礎ヲ得シムルニ在リテ，卽チ能ク國民教育ノ趣旨ヲ達センガ爲ナリ。』[12]

森文部大臣は，一見一戸と似た考えのようにも受け取れるが，本質的には，作業を通して得られる，道徳的価値，体育的価値，社会的実用的価値，経済的価値をも期待しているように思われる。そして経済的なバックアップなしに，手工科を広めようとする考えも窺うことができる。

『然リ而シテ其ノ土地ノ情況ニ從テ之ヲ加ヘ置ク事ヲ得ルトアリテ，加ヘ置クベシト命ゼザルハ則チ是等ノ學科ハ全ク新規ニシテ未ダ適當ノ教員を得ズ，未ダ其ノ費途ノ如何ヲ審ニセズ，未ダ彼ノ土地ノ情況ナルモノヲ祥ニセズ，其ノ他ニモ國勢尚ダ命令ニ依リ之ヲ置クコトヲ許サザルモノアルニ歸ス。』(13)

このような情況の中で産まれた「手工科」を実質的に育てたのは，上原六四郎である。「未ダ適当ノ教員ヲ得ズ」によって文部省が行ったのは，明治20年からの講習会である。これは21年22年と3年続いた。この時の講師が上原六四郎である。文部省は，これと並行して，明治21年ごろ，英国留学中の後藤牧太と独国留学中であった野尻精一の二人に，スウェーデンに於いて，手工について調べるように命じ，これが日本人として始めてのスロイド体験者となる。帰国後，二人は，手工科の普及のため援助を惜しまなかったが，二人とも，主に爲すことが他に有り，上原は，このことに理解の有った手島精一と二人で新人を育てた。この時，一戸清方より若く，上原の最初の教え子である岡山秀吉が登場する。

本論文は，岡山を育てた上原がどのような人物であったかについて簡単に触れ，岡山秀吉の正確な年譜作成を試み，その初期の考え方を述べることとする。

1．上原六四郎　年譜

上原氏の年譜は，今だ正確なものを発見できない。そこで，本論では，信頼性の高い資料の中から業績を拾い出し，年譜作成を試みる。しかし，不完全さは免れない。(14)

①嘉永元年12月3日　—江戸下谷長者町に岩槻藩士上原恭重(よしげ)の4男として生れた
②（年・月，不明）　—市川熊男　芳野立藏両氏に漢学を学ぶ
③文久元年(月,不明)　—医師中島玄覚に就いて医術を修める
④明治2年(月,不明)　—神田一橋　開成所大学南校に入学し仏蘭西語を学ぶ
⑤明治3年12月　—大学少得業生に任ぜらる
⑥明治4年(月,不明)　—第一大学区第一番中学（第一高等学校の前身）に入学し仏蘭西語を学ぶ
⑦明治4年7月　—文部權少助教（通訳）に任ぜらる
—開成学校に移る
⑧明治6年10月　—古市・桜井両氏と明治天皇の前で物理・化学の実験を行う
⑨明治8年(月,不明)　—病気のため退職
⑩明治8年3月　—陸軍士官学校出仕を申し付けらる

⑪明治10年1月　—陸軍士官学校附を申し付けらる
⑫明治10年6月　—軽気球製作御用取扱を申し付けらる
⑬明治10年8月　—内国勸業博覧会に気球を飛揚しこれに乗る
⑭明治11年6月　—陸軍士官学校開校式に気球を再び飛揚する
⑮明治11年11月　—陸軍士官学校　理化学の教官を申し付けらる
⑯明治15年5月　—文部省より専門学務局兼音楽取調掛勤務を申し付けらる
⑰明治16年8月　—文部省より東京職工学校兼勤を申し付けらる
⑱明治16年(月,不明)　—秋頃矢部善藏氏に木工実技を伝修される
⑲明治19年2月　—東京職工学校兼務を免ぜらる
⑳明治19年8月　—東京商業学校教諭に任ぜらる
㉑明治20年6月　—文部省より手工講習会委員を命ぜらる　以後21年22年にも同様の講習会が行われた
㉒明治23年3月　—東京工業学校教諭に異動される
㉓明治23年4月　—第三回内国勸業博覧会の審査官を仰せ付けらる
㉔明治23年9月　—東京美術学校教諭兼任
㉕明治23年10月　—東京工業学校兼東京美術学校教授に任ぜらる
㉖明治24年8月　—東京工業学校附属職工徒弟学校主事を命ぜらる
㉗明治24年10月　—東京音楽学校教授に任ぜらる
㉘明治27年9月　—東京音楽学校が高等師範学校附属音楽学校となるやその教授を任ぜらる　11月には同校主事に任ぜらる
㉙明治32年6月　—高等師範学校に手工専修科が創設され担任を命ぜらる
㉚明治34年6月　—小学校教師用手工教科書の編纂を依嘱される（文部省）
㉛明治36年(月,不明)　—中等教員手工科夏季講習会講師を嘱託され3年間続き，その間，上記教科書の確認・修正を行う
㉜明治36年7月　—図画教科書の編纂委員を嘱託される
㉝明治39年9月　—明治22年創設の手工研究会は明治30年より明治39年8月まで中絶したものを再興する
㉞明治40年10月　—東京美術学校図画師範科で手工の授業を嘱託される
㉟明治45年3月　—退職（上記のほとんど全て退職と思われるが確認できず）
㊱大正2年3月30日　—逝去

上原六四郎の年譜を見ると，上原氏の学問は，漢学と医術とフランス語にある。特にフランス語は堪能であったらしく，⑦のようにフランス語の通訳も行うほどであった。外国に留学できない年代であったから，専門書を読み，ただそのことによって，物理・化学の実験器具を作った。そして，西南の役には，フランス語の実用書をたよりに，軽気球を作り，飛ばしている。

⑱では優秀な職人であった矢部という人について木工術を習い，この時，普通教育に於いて，手工教育の大切さを実感したようである。[15] ⑰の学校に岡山秀吉氏は，ただ一人の

手工科の生徒として入学する。そして上原氏は岡山氏を手工教育の中心人物に育てるのである。この間，商業学校から工業学校へと，学校そのものが生徒と共に移動し，㉙の明治32年に手工科の教員養成学校が確立する。

明治19年に制度が出来て以来，13年目に，手工科を指導する教師の養成学校が設立されたのである。この高等師範学校に上原を助ける形で岡山が就任する。上原は，理科・物理化学や，音楽など，その仕事の範囲は広く，図画にも手を伸ばしている。手工教育の創設期には，手島にしろ，後藤にしろ，上原にしろ，他に仕事を持ち，手工教育は重要だと言いながらも，それに専念できなかった。岡山秀吉は，上原の人がらにひかれ，若い時から，上原の晩年まで上原と行動を共にした。したがって，岡山氏の考え方をたどると，手工教育の本流がつかめると判断し，岡山秀吉の手工教育論に注目したのが本論文である。

2．岡山秀吉　年譜

岡山秀吉氏は慶応元年(1865年)11月4日三重県に生まれ，昭和8年（1933年）5月14日に東京都小石川区（今の文京区）で亡くなられた。満68歳5ケ月余の生涯であった。多くの人々がその業績について記しているが，間違いも多い。それは原典であるべき資料の間違いから起こるものが原因の大きな部分を占めている。

ここでは，信頼性の高い当時岡山氏の近くに居た人々の資料を4種類選び，その記されたものを重ね合わせるということを試みた。このことにより，いささか年譜の信頼性を増すものと考えたからである。以下凡例風に製作条件を述べた後，年譜を記す。

年譜の基本資料

Ⓐ『手工教育學原論』 鈴木定次 著　東京同文館　昭和3年9月25日発行　菊判650頁

Ⓑ『手工研究』第157号岡山先生追悼號　日本手工研究会編（機関誌）昭和8年8月1日発行　菊判168頁

Ⓒ『手工教育原論』 阿部七五三吉 著　東京培風館　昭和11年10月1日発行　菊判470頁

Ⓓ『手工教育原義』 伊藤信一郎 著　東京大阪東洋圖書株式合資會社　昭和13年10月10日発行　菊判578頁

年譜記載上の約束

- 上記Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ の 4 資料を忠実に重ね合わせた。旧字は旧字のまま，誤植は誤植のままにして，注を付けた。
- 定価等の金額は○円○銭と記すべきであろうが，Ⓓ資料の慣例に従って○.○○圓に統一した。再版により定価が異なるものが多く，筆者の手元で確認できるものでも，初版とは異なることが多かった。したがって調べられる範囲で初版の定価を記した。
- 婚姻・出産・死去，等個人的な項目や叙勲の記録も，直接教育に関係無いようにも思えるが，業績に影響を与えることが多いという一面も有り敢て記載した。特に明治・大正期は子供の死亡率が高く，岡山氏も五男一女のうち三男，次男，長女，の順に三人も亡くしている。叙勲に対しても，現在とは趣を異にし，格別の関心事であった。岡山氏のように，たびたびの叙勲は，手工教育の第一任者としの自信と誇りに拍車を掛け，益々努力を重ねたものと思われる。
- 岡山氏の業績は出版点数の多さにもその特色がある。本年譜は特に完全記載を努力した。4 資料に記載の漏れたものは，Ⓜとして追加した。その結果単著，共著合わせて，30冊以上にも及び，その書名を［　］で示した。甲乙丙丁，上巻下巻の有るものは（　）内に示した。版形は，確認できるものは全て菊判であったので省いた。記載の無いものは菊判である。（菊版ともいう。） 尚，菊判とは洋紙の旧規格寸法で縦 22 ㎝横 15 ㎝の大きさのことである。しかしまだ完璧とは言えない。特に私家版や，本の一部分を別刷りし異なる表紙を付けたものもあるので，違う本だと思っていると同じものであったり，一字異なる題名の本が，全く別の本であったりするので，実物を見ていないものには間違いがあるかも知れない。

①慶應元年11月 4 日　―三重縣一志郡高岡村大字目置ニ生レ舊名奥田秀吉ト稱スⒶ
奥田茂兵衛次男トシテ生ルⒷ　二月四日，[16] 次男Ⓒ　中農の家に生れられた。Ⓓ　母てつ子Ⓑ

②明治 4 年(月，不明)　―まだ學校の設けがなかつたから，暫く寺小屋に於いて讀み書きを修められた。Ⓓ

③明治 6 年(月，不明)　―この地（高岡村）にも小學校が創立されたから，ここで正式の教育を受け小學校の課程を履修された。Ⓓ

④明治14年　―村に夜學校が出來て村の青年達も更に教育を受ける便宜を得た。Ⓓ

⑤明治16年 4 月　―高岡村の時の村長前橋三郎平氏は，先生（秀吉）の勉強好きな性格を見込んで，勸めて高野小學校の助教とした。（中略）當時の月給は僅かに三圓であった。Ⓓ

⑥明治20年11月　―三重縣小學校初等科教育免許狀受領Ⓑ　…教員[17]免許狀ⒶⒸ
小學校初等科教員の檢定試驗に合格され，Ⓓ
三重縣一志郡柚原小學校訓導拜命ⒶⒷ　…を拜命せらる。Ⓒ
柚原小學校の訓導に任ぜられ，月給八圓を給せられた。Ⓓ

丁度この時分に岡山家から，先生（秀吉）を是非養嗣子に。という希望があった。

⑦明治22年11月ヨリ同23年4月マデ高等商業學校附屬商工徒弟講習所ニ於テ手工科修業ⒶⒷ …手工科を修業せらる。Ⓒ 手工は，今の東京商科大學の前々身たる東京商業學校の附屬として設けられて居った，商工徒弟講習所の研究科には(ママ)入って修められた。（中略）手工科の修業を志すものは先生（岡山）唯々一人であった。（中略）手工科の理論・工作法・工具の使用法等は上原先生（六四郎）から，實地は主として内山染之助・馬野銀治氏から教へられた。Ⓓ

⑧明治22年12月 ―三重縣一志郡久居町東鷹跡町士族岡山覺ノ養嗣子トナリ岡山ト改姓スⒷ …東鷹跡川(ママ)士族[18]改姓せらる。Ⓒ 入籍の手續を了つて岡山と改姓せられた。Ⓓ

⑨明治23年5月ヨリ同26年2月マデ高等工業學校ニ於テ手工科修業（中途一ケ年間歸鄉休學）ⒶⒷ …を修業（中途）一年間歸鄉休學せらる。Ⓒ 明治23年の三月には同所の規則が改正せられ，名も職工徒弟學校となつて，東京工業學校に附屬し，主事上原先生は東京工業學校教諭に轉ぜられた。これと共に徒弟講習所の職員生徒一同もそれへ移つた。（中略）上原先生は校長手島精一氏と圖つて，先生（岡山）を特別科生として工業學校に移し，4月[19]から機械科に於て學修することを許された。（中略）程なく同校に師範學校の手工科及び圖畫科の教員養成を目的とする機械特別科が設けられ，（中略）一箇年の後，折惡しくも養父の病気に遇ひ，歸鄉して桑名郡高等小学校に奉職し，更に一志郡矢野小學校に轉じて病父の看護に努められたが，養父は程なく永眠された。その後久居小學校は頻に先生（岡山）を招いたが，（後略）Ⓓ

⑩明治24年8月 ―三重県一志郡久居町大字萬町小河良明長女かねト婚姻Ⓑ

⑪明治25年9月 ―再び上京して前の學業を續けられた。Ⓓ

⑫明治26年2月 ―同校を退學し，Ⓓ

―前年から餘暇を以て研究されて居つた音楽を專修するために，當時東京音楽學校教授で，東京唱歌會と云ふ有力な塾を開いて居つた鳥居 忱に就いて研究せられ，（後略）Ⓓ

⑬明治26年3月 ―任千葉縣尋常師範學校助教諭ⒶⒷ …に任ぜらる。Ⓒ 手工及び音楽の擔任として（後略）Ⓓ

⑭明治26年4月 ―尋常師範學校手工科教員免許狀受領ⒶⒷ …を受領せらる。Ⓒ 手工科教員たるの免許狀を得られた。Ⓓ

―千葉縣小學校教員檢定委員ヲ命ゼラル（同27・28年同上委員ヲ命ゼラル）ⒷⒸ

⑮明治27年9月 ―兼任千葉縣尋常師範學校舍監Ⓑ …を兼任せらる。Ⓒ

⑯明治28年5月　—第4回内國勸業博覧會審査第一部品評人を命ゼラルⒶⒷⒸ　…が京都に催うされるや，地方師範學校の一教員たる先生（岡山）が，異數にも樂器の審査に當られた。Ⓓ

⑰明治29年4月　—御用有之秋田縣へ出向ヲ命ス（千葉縣）同月任秋田縣秋田市工業徒弟學校教諭兼校長ⒶⒷ　…出向を命ぜらる。　…校長に任ぜらる。Ⓒ　先生（岡山）は手島・上原兩先生の推薦により，新設の秋田工業徒弟學校長に榮轉された。Ⓓ

⑱明治29年6月　—長男覺太郎出生Ⓑ

⑲明治30年7月　—［普通木工教科書］（250頁　0.85圓《85銭》東京金港堂）ヲ出版Ⓑ　…を出版せらる。Ⓓ

⑳明治31年8月　—次男秀次郎出生Ⓑ

㉑明治32年5月　—依願　免本官並兼官　同月任高等師範學校助教授Ⓐ　免本官竝兼官Ⓑ　…を免ぜらる。　…に任ぜらる。Ⓒ　杉田稔氏の取りなしによつてやつと諒解を得，（中略）榮轉せられ，上原先生を助けて手工教授[20]の任に當られた。Ⓓ

㉒明治33年1月　—女子高等師範學校附屬小學校手工科ノ授業ヲ囑託セラル（38年3月同上囑託ヲ解カル）ⒶⒷ　…を囑託せらる。Ⓒ　…を囑託されて，明治38年の3月に及んだ。Ⓓ

㉓明治33年4月　—高等師範學校附屬小學校の第二部尋常科……當時は1・2年，3・4年，5・6年の3學級複式學級……に手工科を創設し，續いて第3部の單級小學校にもこれを加設し，先生（岡山）が親しく教授の任に當られた。Ⓓ

㉔明治33年9月　—3男三郎出生Ⓑ

㉕明治33年10月　—學術研ノ爲メ日光地方ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

㉖明治34年6月　—小學校教師用手工科教科書編纂ヲ囑託ス（文部省）Ⓐ　…囑託セラルⒷ　…囑託せらる。Ⓒ　文部省から上原先生と岡山先生とに（中略）を命ぜられた。Ⓓ

㉗明治34年6月　—三男三郎死去

㉘明治34年9月　—［高等師範學校附屬小學校手工科教授細目］（38頁　0.15圓　東京　同文館）ヲ出版Ⓑ　…を出版せらる。Ⓒ　高等師範學校附屬小學校は，先生の編成にかかる手工科教授細目を公刊し，小學校に於ける手工教育の内容を明らかにし，茲に手工科實施の端緒を開くに至つた。Ⓓ

㉙明治35年5月　—東京府教育品展覽會審査委員を囑託セラルⒷⒸ　…囑託せられた。Ⓓ

㉚明治35年6月　—（高等師範學校）附屬小學校に保護者懇話會を開くや，當時第一部の父兄であつた菊地大麓・箕作嘉吉氏等から，第一部は教育の理想を實施する所であると云うことであるが，何故に手工を課せ

ないか。との質問があつた。（中略）間もなく第一部にも手工を課し，（後略）Ⓓ

㉛明治36年4月　—4男俊雄出生Ⓑ

㉜明治36年5月　—明治36年開設ノ師範學校，中學校，高等女學校教員夏期講習會講師ヲ囑託ス（文部省）（同37年ヨリ同39年マデ3ケ年間同上講師囑託セラル）Ⓐ　…ヲ文部省ヨリ囑セラルⒷ　…（37年より39年まで同上）Ⓒ

㉝明治36年7月　—［尋常高等小學手工製作圖］（56頁　0.45圓　東京　二原堂）ヲ上原六四郎ト共著出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

㉞明治37年7月　—［小學校教師用手工教科書］（甲154頁　0.20圓，乙144頁　0.18圓，丙103頁　0.13圓，丁254頁　0.28圓，東京　大日本圖書株式会社）（文部省）ヲ上原六四郎ト共著出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
明治36年文部省は，全國師範學校の手工科教員及び附屬小學校の訓導並びに各府縣視學を東京高等師範學校に召集して，編纂者たる上原・岡山兩先生を講師として手工科の夏期講習會を催ほした。この講習會は，主として［小學校教師用手工教科書］の草案を實際に行つて協議し，教科書の使用法を研究したものであるが，愈々定稿となつて明治37年7月にはこれが發行された。Ⓓ

㉟明治38年3月　—女師高等師範學校附屬小學校手工科の授業囑託を解かる。Ⓒ

㊱明治38年6月　—教員検定[21]員會臨時委員被仰付（内閣）（同39年ヨリ同43年マデ5ケ年間同上委員被仰付）Ⓐ　…検定委員…Ⓑ　…を仰付けらる。Ⓒ　上原先生と共に手工科の試驗検定に當られた。Ⓓ

㊲明治38年7月　—［手工科教授書］（543頁　2圓　東京　寶文館）ヲ棚橋源太郎ト共著出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

㊳明治39年3月　—任東京高等師範學校教授同月叙高等七等同五月從七位（内閣）ⒶⒷ　…任ぜらる。Ⓒ　…に榮進された。Ⓓ

㊴明治39年7月　—［手工科教授細案］（219頁　0.60圓　東京　寶文館）ヲ棚橋源太郎ト出版　Ⓜ

㊵明治39年11月　—師範學校及小學校ニ於ケル手工科教授視察ノタメ京都三重愛知滋賀ノ一府三縣ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

㊶明治40年4月　—東京勸業博覧會審査ヲ東京府ヨリ囑託セラルⒷⒸ　…せられた。Ⓓ

㊷明治40年7月　—［講習用書手工教授法講義］（146頁　0.25圓　東京　寶文館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

㊸明治40年10月　—［師範教育手工教科書］（266頁　0.85圓　東京　金港堂）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

㊹明治40年11月　—陞叙高等官六等（明治41年2月叙正七位）ⒷⒸ

㊺明治41年5月　—［小學校に於ける手工教授の理論及實際］（351頁　1.20圓　東京

㊟7

寶文館）ヲ出版Ⓑ …せらる。Ⓒ

㊻明治41年11月 ―長女茂登出生

㊼明治41年12月 ―［師範學校手工教科書］（前篇 186頁 0.75圓，後篇 210頁 0.85圓 東京 實業教科研究組合）ヲ上原六四郎・阿部七五三吉ト共著出版Ⓑ …せらる。Ⓒ

㊽明治41年12月 ―文部省視學委員ヲ命ス（文部省）―（同42年・同43年同上委員ヲ命ゼラル）ⒶⒷⒸ

㊾明治42年2月 ―視學委員トシテ新潟長野ノ二縣ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

㊿明治42年3月 ―［圖畫手工連絡教授の實際］（280頁 1.00圓 東京 同文館）ヲ阿部七五三吉ト共著出版Ⓑ[22]

(51)明治42年3月 ―次男秀次郎死去

(52)明治42年6月 ―［手工科教材及教授法］（222頁 0.60圓 東京 寶文館）ヲ出版Ⓑ …せらる。Ⓒ

(53)明治42年6月 ―長女茂登死去

(54)明治42年6月 ―視學委員トシテ東京市ニ随時出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

(55)明治43年1月 ―陞叙高等官五等（明治43年3月叙從六位）ⒷⒸ

(56)明治44年6月 ―手工科研究ノ爲満二ケ年間米國佛國及び獨國へ留學ヲ命ス（文部大臣）Ⓐ …ゼラルⒷⒸ

(57)明治44年8月 ―留學中女子ノ手工ニ關スル調査ヲ東京女子高等師範學校ヨリ囑託セラルⒷⒸ

(58)明治44年8月ヨリ大正2年11月マデノ外國留學中大正元年1月ヨリ同年12月マデ滿一ケ年間米國紐育ブルックリン，プラットインスチチュートニテ手工科修業ⒶⒷⒸ（ママ）ブラットインスチチュートⒹ
次いで米・英・佛・獨・伊・瑞西・丁抹・瑞典・露西亞[23]等の手工教育を親しく視察調査し，多大の収穫を得てⒹ

(59)明治44年10月 ―五男茂夫出生Ⓑ

(60)大正2年11月 ―歸朝ⒶⒷ …せらる。Ⓒ …された。Ⓓ

(61)大正3年1月 ―拜謁並賢所參拜被仰付Ⓐ 並→竝（ママ）Ⓑ …付けられる。Ⓒ …られた。Ⓓ

(62)大正3年2月 ―叙正六位ⒶⒷ …ぜらる。Ⓒ（大正2年12月叙高等官四等Ⓐ 大正3年2月陞叙高等官四等ⒷⒸ）[24]

(63)大正3年3月 ―第18回視學講習會講師ヲ囑託ス（文部省）―（第21回・第22回・第23回・第25回ノ同上講師囑託セラル）Ⓐ，ⒷⒸ[25]

(64)大正3年4月 ―東京大正博覽會審査官ヲ囑託ス（農商務省）Ⓐ …セラルⒷⒸⒹ

(65)大正3年4月 ―大正三年度第一回師範學校，中學校，高等女學校教員等講習會講師を囑託ス（文部省）―（尚同年度第二回，同十年度・同十三年度ノ同上講師囑託セラル）ⒶⒷ （…第23回…）Ⓒ[26]

(66)大正3年5月 ―全國圖畫手工教育者協議會を催ほし，先生（岡山）を中心として

着實な研究を遂げⒹ

⑥⑦大正３年６月　—文部省視學委員ヲ命ゼラル（大正四・五・十年同上委員ヲ命ゼラル）ⒷⒸ

⑥⑧大正３年６月　—勲六等に叙し瑞寶章を授けらる。ⒸⒷ

⑥⑨大正３年７月　—教員檢定會臨時委員被仰付（内閣）（大正四年ヨリ大正十四年マデ毎年同上委員被仰付）Ⓐ[27]　…昭和８年迄毎年…ⒷⒸ

⑦⓪大正３年９月　—視學委員トシテ福井縣ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

⑦①大正４年４月　—［歐米諸國手工教授の實況］（292頁　0.60圓　東京　教育新潮研究會）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

⑦②大正４年６月　—視學委員トシテ山梨縣ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

⑦③大正４年７月　—附屬小學校（高等師範學校）の職員一同は，歐米に於ける先生（岡山）の視察報告を聽くや忽ち衆議を一決し，三十餘名の職員は先生を講師として夏休みの前後にある短縮授業中の午後を利用し，三週間に渉つて木工の講習を受けた。Ⓓ

⑦④大正４年９月　—小學校教員手工科講習會講師ヲ囑託ス（文部省）（第二回・第三回・第四回同上講師ヲ囑託セラル）ⒶⒷⒸ

⑦⑤大正５年２月　—陞叙高等官三等從五位ⒶⒷ　…せらる。Ⓒ

⑦⑥大正５年７月　—［新手工科教授］（330頁　1.40圓　東京　寶文館）ヲ出版ⒷⒸ[28]（但しⒷⒸは新手工科教授法（ママ）となっている）

⑦⑦大正５年９月　—［手工科新教材集成　紙細工篇］（428頁　2.50圓　東京　寶文館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ[29]

⑦⑧大正５年10月　—視學委員トシテ北海道ニ出張ヲ命ゼラルⒷⒸ

⑦⑨大正６年５月　—［手工科新教材集成　粘土細工篇］（612頁　2.80圓　東京　寶文館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

⑧⓪大正６年５月　—視學員トシテ宮城縣ニ出張ヲ命ゼラルⒷ[30]　…委員として…Ⓒ

⑧①大正７年　—新築された先生（岡山）のお宅は，全く手工の標本で，（中略）居宅の一部に手工室を設け，（中略）階上の客間には紫檀・黒檀・鐵刀木・黒柿・神代杉・薩摩杉・杉・檜・欅・栂・樅・欄・松以下各種の木材を用ひて，Ⓓ

⑧②大正７年６月　—東京盲學校ノ授業ヲ囑託セラル（大正八年三月同上囑託ヲ解カル）ⒶⒷⒸ

⑧③大正７年７月　—勲五等に叙し瑞寶章を授けらる。ⒷⒸ

⑧④大正８年６月　—第一回感化救濟事業職員養成所講師ヲ囑託ス（内務省）Ⓐ　…セラルⒷⒸ

⑧⑤大正８年６月　—［手工科新教材集成　簡易木工篇］（557頁　3.00圓　東京　寶文館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ

⑧⑥大正９年９月　—［新手工科教材及教授法］（307頁　2.80圓　東京　培風館）ヲ出版Ⓐ　…せらる。Ⓑ

⑧⑦大正10年3月	―正五位に叙せらる。ⒷⒸ
⑧⑧大正10年10月	―視學委員として靜岡縣に出張を命ぜらる。ⒷⒸ
⑧⑨大正10年12月	―勅任官ヲ以テ待遇セラルⒶⒷⒸⒹ
⑨⓪大正11年2月	―勲四等に叙し瑞寶章を授けらる。ⒶⒷⒸ
⑨①大正11年3月	―［最新手工教材　板金穿孔彫刻］（35頁　0.35圓　東京　培風館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑨②大正11年6月	―大正11年度小學校教員講習會講師ヲ囑託ス（文部省）Ⓐ　…せらる。ⒷⒸ
⑨③大正11年6月	―［木材着色・ワニス・ペンキ・漆・蒔桧・塗物術］（332頁　3.50圓　東京　大倉書店）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑨④大正13年1月	―長男覺太郎三重縣飯南郡射和村大字上蛸路砂崎德三郎長女ふし子ト婚姻Ⓑ
⑨⑤大正14年12月	―［最新手工趣味の厚紙建築］（271頁　付録有り　3.00圓　東京　文書館）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑨⑥大正15年5月	―從五位に叙せらる。ⒷⒸ
⑨⑦大正15年12月	―［新令準據　高等小學 手工科 指導書］（292頁　1.50圓　東京　蘆田書店）を出版Ⓜ
⑨⑧昭和2年1月	―長男覺太郎，長女てる子出生
⑨⑨昭和2年1月	―文部省から小學校に於ける手工・工業の教授要目並びに標準設備の調査委員を命ぜられた。Ⓓ
⑩⓪昭和2年4月	―［新手工教科書］（上巻　320頁　0.99圓，下巻　356頁　1.10圓　東京　培風館）ヲ阿部七五三吉・伊藤信一郎ト共著出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑩①昭和2年8月	―［新令準據　續高等小學　手工科指導書］（240頁　1.20圓　東京　蘆田書店）を出版 Ⓜ[31]
⑩②昭和3年4月	―勲三等に叙し瑞寶章を授けらる。ⒷⒸⒹ
⑩③昭和3年11月	―多年教育に從事シ勵精其ノ職ニ盡シ功勞顯著ナリ仍テ大禮ヲ行ハセラルルニ方リ之ヲ表彰ス（文部省）ⒷⒸⒹ
⑩④昭和4年5月	―［初等中等手工科教材］（1117頁　7.00圓　東京　蘆田書店）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑩⑤昭和4年6月	―願に依り本官を免ぜらる。ⒷⒸ　後進の進路を開くために勇退せられ，特旨を以つて正四位に叙せられた。爾來講師として東京高等師範學校の手工科を分擔せられ，Ⓓ 本校講師ヲ囑託セラルⒷⒸ　正四位に叙せらる。ⒷⒸ　特旨を以テ位一級被進Ⓑ
⑩⑥昭和6年1月	―文部省から中學校に於ける作業科教授要目の調査委員を命ぜられⒹ
⑩⑦昭和6年2月	―養母みね死去

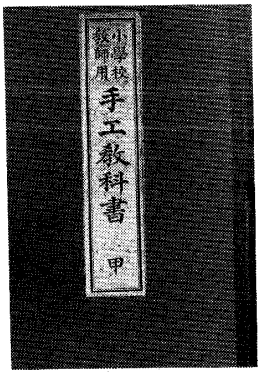
⑩⑨昭和７年７月　　―長男覺太郎の次女ひろ出生
⑩⑨昭和７年10月　　―［新手工科教科書］を阿部七五三吉・伊藤信一郎と改訂出版せらる。ⒷⒸ
⑩⑩昭和８年１月　　―［竹工・指物・玩具・挽物・彫刻・塗装　木工術］（500頁　3.50圓　東京　弘道閣）ヲ出版Ⓑ　…せらる。Ⓒ
⑩⑪昭和８年３月　　―作業科の検定委員を仰付けられ，Ⓓ
⑩⑫昭和８年５月14日　―小石川區竹早町九十四番地自邸にて卒去せらる。Ⓒ　墓所ハ多摩墓地ノ六區ノ九側ノ甲ノ九號　茶屋よしのやニ案内ヲ乞ハルルモ便Ⓑ　四月に流感に冒され，遂に肺炎を併發して，Ⓓ[32]

以上の年譜を見ると，岡山の活躍は大きく５期に分けることができる。

慶応元年 ― 明治26年　修業期
明治26年 ― 明治32年　千葉・秋田期
明治32年 ― 明治44年　留学前（上原氏右腕）期 ┐ 高等師範学校時代
大正２年 ― 昭和４年　留学後（活躍）期 ┘
昭和４年 ― 昭和８年　晩年期

ここでは，岡山が上原と高等師範学校で一緒に活躍した時期の代表著書である「手工教科書」に焦点を絞って論を進めることにする。

３．小学校教師用　手工教科書　に関する考察



上原六四郎年譜㉚明治34年６月に述べたように，文部省は，小学校教師用手工教科書の編纂を上原に依嘱した。しかし，甲，乙，丙，丁と４冊に分かれた教科書が出版されるのは，明治37年７月である。

当時のめまぐるしい教育界の変化や，図画教育の夥しい出版物の氾濫からすると実に慎重に準備された観がある。図画教育に於いては，明治34年６月から明治37年７月までに，記録されているだけでも，約70編の図画教科書が民間から出版されていることは本論文の「はじめに」で既に述べた通りである。しかし手工教育に於ては，教師用７～８編しか出版されていない。小学校の科目名として「手工」が登場してから18年目にして，この低調さを背景として，文部省は，手工教科書を発行した。しかしここでも，図画のような児童用ではなく，教師用であった。当然のことながら，著作権者は文部省となっているが，甲　諸言に『本書ハ東京高等師範学校教授上原六四郎及ビ東京高等師範学校助教授岡山秀吉ニ嘱託シテ編纂セシメタルモノナリ。』と明記されている。この教科書作成の過程における状態は資料によると以下のようである。

鈴木は，この辺を次のように述べている。

『明治16年東京職業学校主事であった時に仏蘭西書より手工に関する記事を読み之を意訳し……』[33]

『三十四年（明治）の六月から先生（上原）と私（岡山）は，文部省の嘱託で小学校教師用手工科（ママ）教科書を編纂することとなって……』[34]

阿部は，次のように述べている。

『明治二十年に至り，文部省は先生（上原）に手工講習会の講師を命じた。先生に夙夜深更に到るまで仏蘭西の原書を調査して，当時仏蘭西に行はれて居た手工教育の方法に先生の意見を加へて手工の講習会を行はれた。』[35]（このことが10年以上後に役に立っているのであろう。）

伊藤は，次のように述べている。

『明治三十六年（中略）手工教科書の草案が出来たから，明治36年文部省から中等教員手工科夏季講習会の講師を嘱託され，編纂の趣旨及びその適用法を明らかにされた。この講習会は，その翌年から三箇年続いて行われたが，先生（上原）は常に岡山先生と共にこれが講師となって理論及び実際の指導に当られた。』[36]

上原は，フランス語の通訳を行ったほどであるから，明治20年頃は，フランス語の原典を意訳し，それを講習会のテキストとして使ったのであろう。しかし，その後10数年間改良しているので，原典は捜し苦く，当時のフランス語の原典が何であるかということは，今のところ筆者には不明である。

LARSSONの「SLOYD」については，次回に述べるが，この本の日本での意訳が，ほとんど原形を留めない所から類推すれば，上原は，今回の「手工教科書」もフランス語の原典をそのまま，移したとは思えない。

上原は，単著がほとんど無い，阿部によると，「手工講義録」「日本俗楽旋律考」「俗楽旋律考」の三冊に止まり，他の五冊は共著で，それを加えても八冊にすぎない。[37] しかも，上原は，明治34年から明治37年にかけては，

- 明治35年1月　文部省より普通教育に於ける図画取調委員を命ぜられる。
- 同年　　4月　文部省より高等女学校教授要目取調委員を命ぜられる。
- 同年　　5月　東京音楽学校校長事務代理

という超多忙であった。結局，音楽学校と高等師範学校の教授はやめるが[38] 両校の嘱託は続けたのであるから忙しさは変わらなかったはずである。したがって，草案は上原であったであろうが，手工教科書の執筆は，岡山が行った可能性が強い。（先に述べたように児童用の教科書は無く，この本も教師用であった。）

手工教科書の構成は以下のようである。

甲．緒言1頁　凡例8頁　巻1　尋常小学校第1学年　　巻2　尋常小学校第2学年

乙．巻3　尋常小学校第3学年　　巻4　尋常小学校第4学年　附録　課業配当表（丁と同じもの）

丙．巻5　高等小学校第1学年　　巻6　高等小学校第2学年
丁．巻7　高等小学校第3学年　　巻8　高等小学校第4学年　附録　課業配当表（乙と同じもの）

凡例におけるものの考え方は，手工教科書出版以後の手工教育に大きな影響を与え，これ以後，手工に対する考え方は，この本の「手工教授の目的」に影響を受けることが多くなる。

『手工教授の目的
手工教授は眼及び手指を練磨し簡易なる物品を正確に製作する技能を得しめ，工具の構造及び使用，材料の品類及び性質に關して日用普通の知識を授け，更に圖畫，理科，數學等に關する事項を實地製作の上に應用して工夫創造等の能力を增進し，且審美の情及び實業愛好の念を涵養し兼ねて綿密，注意，秩序，整頓，節約，利用，忍耐，自治等の習慣を得しむるを以て目的とす。』[39]

この考え方は，それ以前に有ったいくつかの考え方の折衷案であるように受け止めることができる。上原の考え方は，明治21年当時高等商業学校教諭であった時（8月29日），東京府より手工科教授法講義を委嘱され，（市東謙志速記）「東京府学術講義　手工科講義録」教育書房，上巻12月，下巻明治22年2月出版，四六版洋装假綴計262頁[40]によって文字になっている。それ以外，上原の考え方は文字に残っていないので，今となっては唯一の手がかりであり，この考え方が「手工教科書」によって，我が国の公式の手工の考え方になっていく。

その考え方は，大まかにまとめると以下のようになる。

A．農業国より工業国への変換，そのためには，江戸時代地位の低かった工業の地位を高める。その手段として小学校に手工を設ける。

B．普通教育の中で身に付けた知識を実地に実践することによって，人間形成に寄与する。

この考え方は，上記，手工教科書　手工教授の目的　の中に明確に出ている。すなわち

①＝A　簡易なる物品を正確に製作するの技能を得しめ……

②＝B　日用普通の知識を実地製作の上に応用し……能力を増進し……審美の情……実業愛好の念を涵養し……の習慣を得しむる……

①　は当時の社会からの強い要求であり，②　は上原が手を使ってものをつくることを実践し，普通教育に於いて，そのことが重要であると体験的に感じ取っていたものである。

次に手工教科書では，手工教材の選択として，おおよそ次のようなことが上げられている。[41]

③　教材は広き範囲内に於いて選択して，成るべく種々の材料及び工作法に接せしめて技能の一般的基礎を養成せんことを期したり，

④　最も簡囲なるものより漸次実用的の複雑なるものに及ぶの趣旨により……

⑤　児童の経験界に鑑みて，彼らが日常接触してその観念の明瞭にして且興味に富めるものに求めたり，

次に手工教材の排列　として，おおよそ次のようなことが上げられている。

⑥　色板排，豆細工とひとつずつ行う方法と，それらいろいろ混合して児童の心理的要求によって行う方法と二つある。後者は，固有なる形式を追う上で不利になる。また，材料用具を整頓する上で不利になる。故にこの両方を折衷して……

⑦　季節に関係のあるものは適当の時季に配当すべく……

⑧　他教科に連絡する事項は，その趣旨を貫徹する……

次に手工教授の方法　として，おおよそ次のようなことが上げられている。

本科は技能科に属し即得の観念を製作上に発表せしむるを以て旨となすが故に……

⑨　準備　観念を明確にし，……教師自ら工作を実地に行ひ示して……

⑩　実習　教師はこの間絶えず机間を巡りて……各児を指導し……姿勢の正しからざるものに注意を与え……

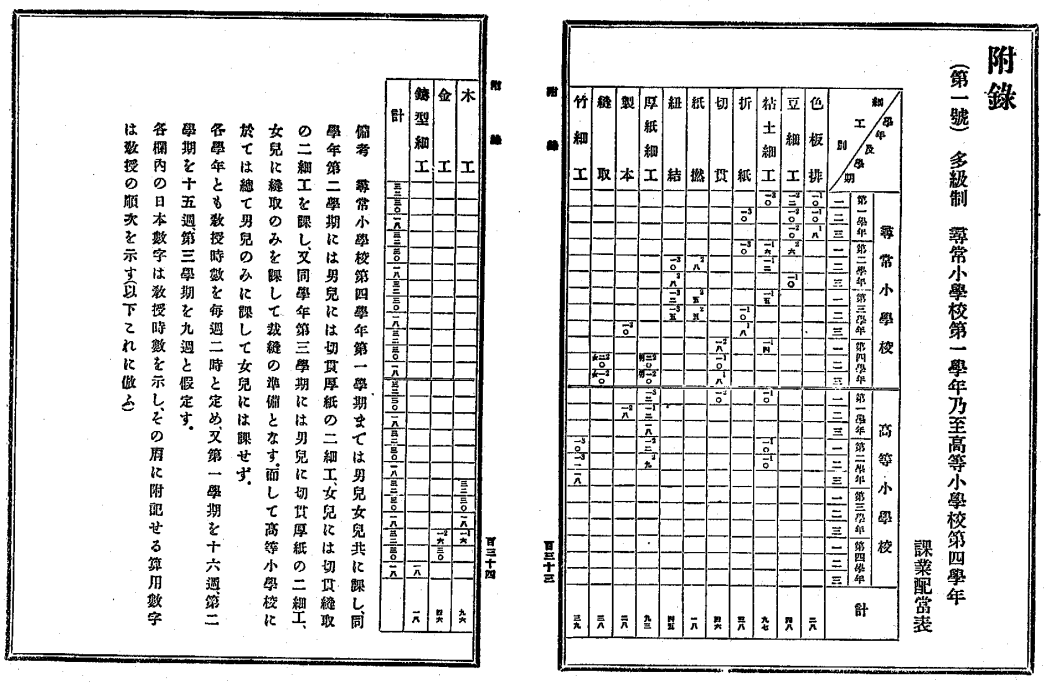
⑪　成績の処理　批評し訂正し，或はその一部を修正せしめ，或は全体を改修せしめ……

本書使用上の注意において，一，二の細工に熟練させて生産に直接結びつけてはいけない。それは，実業学校で行うことであるとも述べられている。(42)

以上の点を実用教育Aの立場と普通教育Bの立場とに分けてみると，

A	①		③	④		⑥					⑪
B		②	③	④	⑤		⑦	⑧	⑨	⑩	

となり，折衷と言っても，やや普通教育に比重がかかっている。この不明瞭さは，後に岡山，一戸論争へと発展していく。



附錄

（第一號）多級制　尋常小學校第一學年乃至高等小學校第四學年

課業配當表

細工及學期	尋常小學校 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	高等小學校 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
色板排	一	一	一	一					二八
豆細工	三	三	一	一					四八
結土細工	一	一	一	一	一	一			九七
折紙	一	一							四八
切貫			一	一	一				四六
紙撚			一	一					四六
紐結		一	一	一					四四
厚紙細工			三	三	三	三			九三
製本	一				一				三八
縫取	一	一							三八
竹細工					一	一			三九

附錄　百三十四

附錄

備考　尋常小學校第四學年第一學期までは男兒女兒共に課し，同學年第二學期には男兒には切貫厚紙の二細工，女兒には切貫縫取の二細工を課し，又同學年第三學期には男兒に切貫厚紙の二細工，女兒に縫取のみを課して裁縫の準備となす。而して高等小學校に於ては總て男兒のみに課して女兒には課せず。

各學年とも教授時數を毎週二時と定め，又第一學期を十六週，第二學期を十五週，第三學期を九週と假定す。

各欄内の日本數字は教授時數を示し，その肩に附記せる算用數字は教授の順次を示す（以下これに倣ふ）

細工及學期	尋常小學校 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	高等小學校 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
木工									九六
金工									四六
鋳型細工									一八
計									一八

百三十五

手工教科書 2　P.133－P.134

具体的な教材は，恩物と重なるものが多い。しかしフレーベル自から決定したもの（第六恩物まで）からは採用せず，色板排→第七板，豆細工→第十九豆細工，粘土細工→第二十粘土細工，折紙→第十八折鶴，切貫→第十四紙きり，紙撚→（第九糸紐），紐結→第九糸紐，厚紙細工→（　　），製本→（　　），縫取→第十二縫取り，竹細工→（　　），木工→（　　），金工→（　　），鋳型細工→（　　）のように，尋常小学校の部分は，フレーベルの考えから発展した恩物であるところの，第七から第二十の恩物をヒントにしていると言える。尚，（　）内空白は該当する恩物がないことを示す。

上原は，「手工科講義録」（前掲）の中で，木工第一主義を唱えている。これは，スロイドの影響が強いのであるけれども，この考えを，小学校の実践に対応させた岡山は，具体的には，恩物を拠り所とした。それは，木工が我が国に，まだ馴染まなかったことによる。このことは次回で詳しく述べたい。

おわりに

前記したBの部分は，現在の図画工作や美術の教育の中に色濃く残っている。明治時代に於て，手工は，教科の片隅に，ひっそりと存在していた。しかし，その内容は，100年以上も経った現在までも，その影響下にあるとも言えるのである。

本論文は，「手工」に注目し，その中心に居た岡山秀吉の行動，業績を，なるべく，当時の文献を重ね合わせ今まで不明であったものを明らかにしようとする試みの第1回目のものである。

註

（1）一戸清方「日本手工原論」成美堂　明治40年（1907）4月1日，引用P.62～P.63　但し（　）内は筆者。

（2）伊藤信一郎「手工教育原義」東洋図書　昭和13年（1938）10月10日，「36手島精一氏とその手工教育観」の中にP.136「氏は，工業教育の経営に任ぜられたばかりでなく，博覧会の開催に興り，その用務を帯んで欧米に渡られたこと実に8回に及び……」とある。

（3）瓜生　寅「小学校用　手工篇」普及舎　明治20年（1887）7月，引用P.3～P.4。

（4）熊本高工「工芸教育文献調査」岡山大学教育学部研究集録第51号(1979)，引用P.10～P.12。

（5）山形　寛「日本美術教育史」（図画）教科書一覧表P.107～P.130による。

（6）伊藤信一郎　前掲書　引用P.151。

（7）鈴木定次「手工教育学原論」同文館　昭和3年（1928）9月25日，引用P.152。

（8）阿部七五三吉「手工教育原論」培風館　昭和11年（1936）10月1日，引用P.463。

（9）一戸清方「理論実地手工書」大日本図書　明治25年（1892）10月14日，引用P.1及びP.3～P.4。尚，同書は上原六四郎校正となっており2頁の序を載せている。檜垣直右は8頁の序を載せている。

(10) 一戸清方「日本手工原論」(前掲書) 引用 P.1。
(11) 文部省「学制百年史・資料編」引用 P.89。
(12) 伊藤信一郎　前掲書　引用 P.231。
(13) 同上　P.231。
(14) 鈴木定次「手工教育学原論」(前掲書) P.124〜P.143。
阿部七五三吉「手工教育原論」(前掲書) P.413〜P.433。
伊藤信一郎「手工教育原義」(前掲書) P.114〜P.132。
以上三資料を重ね合わせて年譜作成を試みた。
(15) 伊藤　前掲書　P.116。
(16) 資料Ⓑは縦書きにして，一一月と記してある。読み方によっては二月とも読みとれるので，おそらく阿部は，昭和8年のその年譜を読み違えたものであろう。
(17) 資料Ⓑは教育免許状となっており，他は教員免許状，あるいは教員の検定試験となっているので，おそらくⒷの誤植字と思われる。
(18) 三重県久居町は現在久居（ひさい）市である。その中に東鷹跡町（ひがしたかとまち）は有る。しかし東鷹跡川という地名は無い。したがってⒸの誤植字であろう。
(19) 3月に規則が改正され，学校全体が移動するのであるからⒶⒷⒸ資料のように5月からの方が正しいように思われる。
(20) 手工を教えられたの意味。
(21) 委の字が抜けた誤植字と考えられる。
(22) Ⓒに明治40年8月図画手工連結（ママ）教授の実際を阿部七五三吉と共著出版せらる。とある。しかし，これは明治42年3月の明らかなる間違い。
(23) 米＝アメリカ　英＝イギリス　佛＝フランス　獨＝ドイツ　伊＝イタリア　瑞西＝スイス　丁抹＝デンマーク　瑞典＝スウェーデン　露西亞＝ロシア
(24) 叙については，ⒶⒷⒸとも混乱している。特にⒷは大正21年と明らかに誤植字である。これ以前の例を見ると資料，Ⓐに間違いが少ないので，Ⓐに信頼性があるようにも思えるが不明である。
(25) ⒷⒸ（第2・22……）となっているが，常識的に考えてⒶのように第21・22と考えた方がよい。したがって第2は誤植字と考える。
(26) Ⓑ資料二三回を縦書きしてあるので23回に読める。明らかに読み違いである。
(27) Ⓐは執筆現在までと受けとめられる。理由は岡山先生略歴が大正11年までしか記されていない。P.146。
(28) ── 法は原典とは異なり明らかなる間違いである。
(29) 筆者の手もとにあるものは大正8年4月5日発行となっている。しかし定価も3円80銭となっているので再版されたものであろう。
(30) 視学員は視学委員であり Ⓐの誤植字であろう。
(31) 昭和6年1月新令準拠続高等小学手工教科書ヲ出版とⒷⒸにあるが，これは再版と思われる。
(32) 岡山秀吉氏の最後についてはⒷ P.62〜P.73に詳細な記録が長男覺氏によって記されてい

る。それによると,「六十九年の生涯に別れを告げました。時に昭和8年5月14日 午前8時50分。」

(33) 鈴木　前掲書 P.125（尚，以下必要なもの以外の引用漢字は現代に直した。）

(34) 同上 P.131～P.132　これは「手工研究」第42号上原先生追悼号より転載した部分で分かり苦いので（　）を筆者が補った。

(35) 阿部　前掲書 P.421～P.422。

(36) 伊藤　前掲書 P.119。

(37) 阿部　前掲書 P.432に詳しく載っている。

(38) 伊藤　前掲書 P.119。

(39) 小学校教師用　手工教科書　凡例　引用 P.1。

(40) 伊藤　前掲書 P.117。

(41) 手工教科書（前掲書）　凡例 P.2（以下，漢字は現代に直してある）。

(42) 同上　凡例 P.7。